

●「野火」(兵庫豊岡市) 26号

「野火」は表紙も鮮やかで、それを象徴するようにメリハリの効いた作品が多い。小説を楽しむことを知っている書き手が集まっているようだ。

「小人閑居して」(夏川龍一郎)は、警察を退職した主人公という設定がまずおもしろい。精神病にかかったり、警察でのあれこれを話しながら、現在は酒浸りの生活、二人の友達がいて、美津子と市丸。美津子は自分と同じ鬱病、市丸は売れない絵描き、退職金の一千万円を算段なく親戚に返してしまったり、気分ですぐ宴会を始めたり、ハチャメチャだがなんとなくやっていく、人生や世の中をバカにしていながら、厳しさも見つめつつ、なおも楽しくやっていく姿勢が何か強靱なものを感じさせておもしろい。スナックに勤める美津子から「店を持たせて」とねだられ、安請け合いうして競馬場に行き、なんとなく一億円を儲けてしまう。「競馬は怖い。二度と競馬には手を出さぬ」などというところがいい。一つの達観がないと、このような突き放した姿勢は出てこないだろう。深さと悲哀をたたえながらめげないたたかさを楽しませてくれる小説だ。

「落書きの遠吠え」(神尾与志広)も大胆なストーリーで、読ませる。駅の落書きと女の水死人から始まる書き出しは、どうやって進行させるのかと思わせる意外性に富んでいる。女性の水死人のむごたらしい様は強烈なりアリテイを持っている。この二つの振幅のうちに、物語が進んでいく。その手際は鮮やかで、玲子というまじめな仲居の子供をほしがると途な思いと葛原の交錯もよく書けている。最後まで少し玲子の最期に筆が及んでもよかったかもしれない。

●「ベン」(富山県富山市) 4号

この誌はまだ4号だが、力量のある書き手が揃っている。表紙はややしろりとくさいものの手作りの味は伝わってきて、中身は落ち着いた安定感が感じられる。「蕎麦の花」(神通明美)はセンターラインをオーバ

うことでもある。そのあたりをどう処理していくかが課題だろう。

●「ざいん」(北海道室蘭市) 13号

「ざいん」は光城健悦氏が発行人となっている室蘭市のハイレベルの文芸グループ。腰の座った重量感のある書き手が揃っている。

「請願巡査」(井村敦)は昭和初期だろうか、組の近代化と跡継ぎの紛糾から、まだ国家統制されていない石炭のまとめ買いをし詐欺にひっかかる一つの没落が描かれている。二五〇枚を超える力作。なぜこの時代を書くのかという必然性が最後までひっかかる。林蔵という人物は興味深いので、彼を中心にもっと短く彫り深く書いたほうがよかったのではないか。手堅い筆はすべにあるレベルに達しているの、何をどのよう書くかもっと突き詰めてから筆を握るべきだろう。この巡査は人物像として弱い。

「近代・現代文学の中のアイヌの人たち」(浅野清)

は文学作品に書かれてきたアイヌをめぐる意欲的な検証評論。第一回は明治二二年読売新聞紙上に書かれた幸田露伴の「雪粉々」を取り上げて詳細に記述している。「雪粉々」は一七世紀のシャクシャインの戦いを素材にしているが、その歴史事実を辿りながら、幸田露伴の事情、明治の時代背景まで捉えつつ、着実な筆で掘り起こしていく。重要な作業であることも、またたいへんな作業であることも理解できる。とんでもない問題にぶちあたることもあるだろう。しかしこういうことはだれかがやらなければならないことなので、困難を越えて、完成してほしい。

「冬の透視図」(こしげきこう)は、検死死体の観察アルバイトの話である。俯せになった女性死体を水槽の中に見ながら、死と向かい合う存在の直視は、鋭い問いかけとなって迫ってくる。死とは何か、そしてそこから自動的に反射される生とは何かという問いが、自身の浮遊した生活を粉砕してくる。「死」という時間のずつと向こうに見えるものは何なのだろうか。それ

ーしてきた対向車にぶつかって重傷を負い再起不能となった主人公に、昔句会で心を通わせた女性からの励ましで生きる力を得ていく筋書き。この作品は、特に蕎麦の花のシーンが美しく書けている。白い蝶の舞は、鮮やかに胸に残る。読後感もいい。ただ、負傷した主人公に妻や家族はどう働きかけ、どう励ましたのか、近い人たちの存在が薄いのは惜しい。

「雪の宿」(川島昭子)の文章もいい。落ち着いたなかに、実直な姿勢がある。若年性アルツハイマーになった恋人といっしょに踏み出していく小説だが、輪郭だけのようなまとまりの小ささはあるものの、今後の素材との向き合い方で伸びていくかもしれない。

●「姫路文学」(兵庫県姫路市) 119号

「姫路文学」は小太刀の切れがある書き手が多い。同人雑誌も人間の集まりである以上、そこに集まる人たちの共通した好みや志向によって、一つの傾向が出てくるのは自然なことであり、その流儀や傾向の長所をさらに育て生かしていく自覚的な努力も一つの文学的価値を形成していくだろう。その意味で、この小太刀の鋭い切れは大事にしていってほしい。

「掌小説三篇／そら豆の煮えるまで」(山本順子)の短文の切れ味は特にいい。言葉の跳ねが生きている。関西弁の生き生きした人なつこさを基調に、躍動している。この切れ味でどんな生活圏を切り取っているたら、おもしろい人生模様浮かび上がってくるだろう。感覚もいい。リズムもある。一つの才能にはちがいない。

砂原唯男「短歌&イラスト」は、イラストと短歌を同時に提出する新しい手法。この大胆な方法は注目に値する。パソコンなどが高度に発達した現在、パソコンによるイラスト描きは手近な表現手段になった。そのイラストと短歌を組み合わせた新しい表現が出てきてもおかしくない。これは最先端の表現と言える。この作者の短歌がまたすばらしい。「大道に人ら笑ひて屯する幻人の瓜甘噛みにつつ」「蜘蛛の糸くんだり月華

こそが俺自身の死の遠近法なのだろうか」死体を扱った小説には大江健三郎の「死者の奢り」があり、三十年以上前に文学界新人賞を受賞した「浮上」という優れた作品もあるが、量も含めてそれらよりやや小粒な感じはするものの、異なった見方、異なった描き方も見られて、時代としての新しさもある。臀部から小さな金属棒を突き入れて細胞を取る作業は前述の二作品には見られないし、死の醜さはこちらのほうが生々しい。時間が来ると死体は浮上する。そして空気に触れて俯せになっていた体が反転すると、紫色に腐った体が無惨に目の前にひろがる。その醜さに圧倒される。「だからやめとけと言ったんだ。まもなく死斑が目も当てられなくなるんだ」この強烈な現実打ちのめされる自己、そして何よりも未来という時間を死体との決定的な差として措定する姿勢はこの作品の一步積極的なものだろう。「未来の時間は、腐敗し停滞した今日を鋭い切っ先で痛めつけながら、繰り返されると同時に、新しいものを生み出そうと痛みに耐えている。

／どのように今日、現在を生きるべきかという問いの答えを浮き上がらせるには、頭上から垂直に降りてくる横なぐりの光を受けてこそ、今何をなすべきかが正確な透視図として浮き彫りになるのだろう。未来の時間を切り捨て、瞬間の快楽だけに支配された今日は、決して生きていかないし、朽ちる一方なのだ」この鋭利な問いかけは、きわめて新鮮だし、衝撃性を持っている。その女性の死体にずつとつきまとわれ、それと格闘して、一五年後にやっと和解し、現実の女性を愛し、子供の誕生を受け入れるラストは輝いている。タイトルに死体を想わせる言葉がほしいのと、導入がもたついですぐにシーンに入っていないのは不満だが、優秀作として多くの人に読んでほしい作品である。

●「連用形」(三重県四日市市) 28号

「連用形」は中山みどり氏の個人誌であるが、毎号清水信氏が同人雑誌評&書評を掲載しているのが特に貴重。中山氏の作品は小説「おじいさんの恋」よりもエ

の芯にゐる畢生の韻光らせながら」などどれも一つの大きな世界構築をなしている。装飾的な表現のうちに透徹した世界への深い眼差しに支えられた大規模な表現は、我々の日常を宇宙へと浮遊させる。現在の大手の短歌雑誌の賞の歌などよりはるかに優れている。これからこのジャンルをどのように切り開いていくか楽しみである。

「村野四郎——「犬」意識の流れ」(二) (石山淳)も腰を落として緻密に論考を進めている。

「ぶんごう 太宰への旅」(八) (井上久男)も丹念に調べて太宰の足跡を追っている。楽しく読める。「文豪」ではなく「ぶんごう」とひらかなにしてあるところが、太宰嫌いの読者にも配慮しているようで、柔軟さもい

●「小説図鑑」(神奈川県横浜市) 29号

「八ヶ岳」(小林信良)は乳癌の妻をよそに会社の若い女性社員と二人きりで八ヶ岳へ登る話。山の雄大な自然の中でその息吹に触れながら夜は結ばれるその男女のくすぐりは手が慣れている。男女間のいいかげんさを足下に自覚しながら、妻との子供が自分の血液型と合わないことを振り返りつつ、若い女性社員とも体を合わせていく。親しくなっただけの女性社員が山から下り日常に戻ると、若い男性社員と結婚していく。現代的な軽みの一方で、深く交わりながらすれ違う男女の奈落感を覚えさせる小説でもある。

「青年」(九野啓祐)の文章は詩の響きが反社会的の餌となつて透明な世界を見せてくれる。世界が異なった相で立ち上がってくる散文詩的な造形力は新しいものがある。世界との違和の対決は青春の反響音となつて確かに震えている。前半はいい。しかし、婚約者の、魅力ある女性が登場し、生き生きと喋り始めると、詩が彼女の会話の中に移ってしまい、青年の詩性が吸収されてしまう。彼女の存在の方が大きくなって、青年が霞む。青年が詩的であるということは、孤独の壁にこもる構造が不可避で、女性の中に包含されないとい

ッセイ「黄山へ」のほうが文章に定着感があつていい。小説の方は文や言葉がやや浮き気味になる。自分や事実に密着しているほうが重みが出て質がよくなる。

清水信氏の評はさすがに鋭利。今日このように率直に言う評論家が少ないのに対し、清水氏の筆はまさに快刀である。「文芸中部」8号掲載の「空に落ちる」(名村和美)「かきわりの家」(北川朱実)「縄文人」(吉村登)を、「この三作は作品として割り切れていない。中途半端である」と言い切っているのも鮮やか。また村上春樹の「1Q84」をめぐって、「一様に諸評氏は興奮状態である」「清水良典は『七年間の飢えに満たされた』と書評を結んだ」「一斉にトーンが高い。／にもかかわらず、中部東海の同人雑誌に拠る作家たちのすべてが、そっぽを向いている。この格差は何だろう。／共に現代文学に深く関わっているがら両極端に位置を占める両者を結びつけるものはあるのだろうか。新宿の街に「1Q84」を買うために」並んでいた文学愛の深い読者を、自分はバカに出来ないでいる。といつて、彼らを無視する同人誌作家諸君もアホだとは思えないのだ」という冷静な眼もさすがである。

●「五鉢鉢」(広島県広島市) 7号

この誌は副題に「山陽と山陰を結ぶ」とあるので、山陰地方の方も同人に加わっているように思える。「鉢」とは密教で煩惱を破碎し、菩提心を表す法具」とある。

「あとで」(城野栄仁)は、「ここで待っていて」と囁いて消えていった女性を待つ路地の奇妙な時空がテーマ。「待つ」という苛立ちの時間のなかで、空間がねじれ、時間が歪曲する。壁越しに聞こえる奇妙な声や言葉が、生活や世界の異邦性を拡大して見せ、迷路のおもしろさをかき立ててくる。様々な声の中で「ああ、もうだめだ、あの女はおれをナメクジ野郎とののしつて出て行った」「それでも日が暮れば少しだけ鉢の底からぬけ出して鉢の上にある花をかじって、朝にな

れば鉢の底に帰る。これが最大の楽しみというのがある。女には分からなかったのだ」という言葉のおもしろさは出色。こういう言葉を紡ぎ出す人物はいつたいどんな人物だろうと会ってみたいくなる。ナメクジの這い跡のきらめきのはかない美しさがこの文章には確かにある。後半喫茶店に入ってハニワというマスターらしい男が出てから、急にトーンが落ちておもしろくなくなる。やはり「待つ」という時間が消失すると、この虚構世界は成り立たない。短編の中に無限に没頭し、のめり込む世界が確かにあることを自覚し、姿勢と方法を確立していったら、他の追従を許さない独自の世界が切り開かれるだろう。

●「九州文学」(福岡県) 527号・528号・529号
 重厚な伝統同人誌はさすがに読み応えのある内容。今回も楽しませてもらった。

527号。「霊視の刻」(船越節)は、テレビのワイド・ショーのプロデューサーが主人公の物語。視聴率が上がらなくて上から圧力を受けているとき、霊能者慈恵を番組に起用し、とんでもない霊の世界に突入する。その顛末を迫力ある筆致で一氣に読ませる力は相当なものである。筆力は高い。しかし引きずられて読んでしまう興味の本質は、ワイド・ショーの興味であって、人間への興味ではない。霊媒やオカルトという領域への興味であって、心理や運命の本来の文学の興味ではない。読み終わっても一つ深く残らないのはそのためである。ここには普通の人間が手の出しようがない事柄がどどん動いているので、理屈や理性で追いつめていくことができない。本来の人間の問題からむしろ離れていくことが、結末の弱さをも招いている。これに文学の骨格を入れるとなると、きわめて高度な技量が必要になるだろう。それはこの主人公を巻き込むしかないが、難しい技ではある。

歴史小説「雪の日の使者」(西田英樹)は井伊直弼が暗殺された桜田門外の変の直後を扱っている。手堅く、身代わりになった若者を中心に書いてあって緊張感がある。スードモデルの主催者とも肌を重ねたり、他の男と旅行に行ったり、なぜか年上の男にひかれる自分を見つめている。しかし肉体的な変わり目にさしかかり、母親が膀胱痛になって余命少ない事態に直面し、様々な面で人生の転機を自覚し、母と別れた過去の自分の父親を訪ねていく飛行機の中で終わる。まとまりはあるが、主人公の悩みや心の動きが、やや滑らかすぎる。雰囲気はあるものの苦悩として成立していない。主人公の中しつかり作者が入り込んでいない恨みが残る。男女間ももう少し濃密であってほしいかもしれない。

「香忍寺落椿」(市川しのぶ)も文章はじつくりとした快さがある。京都の小鼓の宗家で父親がそれを継ぐ重さに耐えられず自殺する。母親も自殺未遂で回復したものの幼児同然となって子供の顔さえわからない。しかし小鼓だけは打ち鳴らす。主人公の律子は家庭の暗さから逃げるように東京芸大の和楽へ進学するが、都会の生活や家庭の急迫に耐えられず、神経症になって帰郷する。腹違いの兄は古刹を継ぐが、生活は厳しい。京都の四季の移ろいのなかで庭の椿の色が鮮やかさを増すなか母の小鼓の音が響くというストーリーは趣きにも富んでいてなかなかのもの。これは京都の小鼓宗家の伝統とその没落、寺院の現代での経営事情、芸大の和楽の世界など多くの興味深い領域を包含している。描写の密度を高くし、組み立てを大きくしていけば長編小説にもなる可能性を持っている。

巻末の「同人雑誌の周辺」の同人誌評も丁寧になされていて、書く人の大きな指針となっているのは心強い。

●「流水群」(鳥取県鳥取市) 52号
 「流水群」は気骨のある書き手ががっしり屋台骨を支えている。

「高野実と作品のかたち」(馬淵典夫)を読むと「パライア」から「水花期」、そして「流水群」と形を変えて続く同人雑誌活動の過程で、いかに高野実とい

感が漲っているが、桜田門外の変の歴史事実や幕末の知識の乏しい人にはよくわからないかもしれない。正三郎の動機もここではやや甘く浮いて見える。また結末が、彼らが結局どうなったのか曖昧に終わっているもつとはつきりさせてもよかった。また普通なら首を取られた相手の藩の使いをそのまま帰すことなどはないはずなのに、あえて帰らせる彦根藩内の事情が不十分。現在なら内閣総理大臣の首が取られた大事件であり、幕府の権威は失墜、その幕府の側の狼狽、彦根藩内の混乱と事態の收拾策などをもっと綿密に書く必要があったのでは。そうでなければ無事に帰れるはずがない。藩内には安政の大獄の理論主導者・長野主膳という怪物もいるはず。この事件から一氣にテロの時代に入ったいく幕末の歴史認識が反映されていないのが、せつかつの素材を軽くしている。

528号は「仙造の結婚」(川島英夫)がおもしろかった。火葬場の囁託で五十年働き、死体を焼き続けた独身老人が突然「結婚したい。二十代の女性と」と言い出し、結局それを実現していく話だが、素朴な文章がこのテーマに合って、手堅い実直さと溶け合った物語を展開している。最後の話も納得させられる。身寄りのない少女の死体を焼いたとき夢の中でその少女が結婚の話をお勧め、「私があなたのお嫁さんになってあげる。私を探さない。私を……」と言ったという。いつも死体を焼いている男の話としてリアリティがあり、これを結末に持ってきた手腕は光る。佳作である。

「信長に槍をつけた男」(西津弘美)は、歴史考証。安田作兵衛の像をめぐって資料を渉猟する。歴史事実を求めて様々な資料を散策し、考証を重ねていく情熱は、こちらも熱くなる。重複を恐れず、重層的に積み上げていく厚い提出の仕方は、信長の最期という劇的な歴史事実が永遠に奏で続ける魅力湧き出させ、かえってその死に迫って信長のラストを浮かび上がらせる効果をあげている。森蘭丸の姿も鮮明に浮かんでくる。さらに光秀がどのようにして信長への反感をつ

らせていったか、その心理も、無念の思いも、よくわかる。この考証を通して我々は歴史の相貌に立ち会っているのだから、汲めどもつきぬ歴史の泉の美酒を飲むことになる。読みにくさを超えて引きつけられるのは、筆者の情熱とともに、歴史の美酒を飲むうまさ起因するものだろう。

529号「あの日へ続く道」(林由佳莉)は文章がいい。一つ一つの言葉が快い流れの中にそれぞれ定着性を持っていて、心に深く入り込んでくる。人生で進路に迷ったとき、風景の中で自然の風物に心を寄せることによって未来の自分が語りかけてくる。また数年経って道に迷うとき、過去の自分に呼びかける姿を確かめる。具体的なシーンとして未来と現在とをはつきりつなくリアリティにこそこの小説の価値がある。人は未来と繋がり、過去の自分と、運命という時間の姿をおしつてつながっている。そこでは時間が螺旋を描き、過去と未来が接し、異空間の生命現象の構造を露出させる。一回だけの生の秘密の奥処に迫る螺旋であり、現代の輪廻とも呼べる構造がそこにある。その螺旋を感じさせる部分は、恐怖さえ覚える。未来の自分と過去の自分が呼び合う瞬間が確かに人生にはある。それを明らかにしたこの作品は一つの積極性と同時に、懐かしく深い回帰の安堵をも与えてくる。最後に子供の頃の「幽霊事件」や「あの日へ続く道」の時間を飛び越える話もよくつながって空間を深めている。ただ、最後の二行は道徳の教科書を読まされているようでした。それは直してほしいし、短さに物足りなさも覚えるが、明らかに優秀作のレベルに達している。

●「弦」(愛知県名古屋) 85号
 「弦」のグルーブの文章は、読みやすい。言葉がこなれている。

「紙ぶき温泉」(木戸順子)の文章は、短い文の中に艶がある。きめ細かい肌の感触を覚えさせる女性らしい文章だ。物語はスードモデルをして喫茶店経営の足しにしている三十代後半の主人公の迷いを軸に動いていく。来としつかり向かい合っているものが印象に残った。優秀作は「冬の透視図」(こしばきこう)、「ざいん」13号)、もう一つ「あの日へ続く道」(林由佳莉)、「九州文学」529号)。後者は最後の一文を直すという条件付きで推したい。

準優秀作は、「小人閑居して」(夏川龍一郎)、「野火」26号)、「蕎麦の花」(神通明美)、「ペン」4号)、「掌小説三篇」(そら豆の煮えるまで) (山本順子)、「姫路文学」119号)、「青年」(九野啓祐)、「小説図鑑」29号)、「あとで」(城野栄仁)、「五鈴」7号)、「仙造の結婚」(川島英夫)、「九州文学」528号)、「紙ぶき温泉」(木戸順子)、「弦」85号)、「豚を飼う」(榊井和道)、「流水群」52号)の八編。

あと特別ジャンルとして「短歌&イラスト」(砂原唯男)、「姫路文学」119号)を優秀作、また評論・考証部門で「近代・現代文学の中のアイヌの人たち」(一) (浅野清)、「ざいん」13号)、「信長に槍をつけた男」(西津弘美)、「九州文学」528号)を準優秀作に挙げたい。寄せられてくる同人誌もますます多くなっている。読んでいない誌も、後回しにさせていただいた誌も少なくない。同人雑誌の方々に、身びいきではなく、よい同人雑誌の作品があったらぜひ同人雑誌振興会に推薦していただきたい。態勢を整えつつ、さらに一歩、積極的にやって行きたい。

「文芸思潮」は東京ではジューク堂池袋本店、紀伊国屋新宿本店で販売しております。また富山でも紀伊国屋富山店、中田図書販売で販売しております。よろしくお願ひします。